

第 27 回(2009.11. 15 配信)

雲竹齋先生の歴史文化講座 - 「子(ね)はネズミ」

これまで、旧暦や干支の話をおさらいしてきたが、今回から「干支にまつわる動物の話」にはいる。「十二支」は「十干」同様に、中国の「殷」の時代(紀元前17世紀～紀元前11世紀、日本の縄文時代にあたる)に始まった、植物の生育状態を示す言葉として使われ、のちに覚えやすいように身近な動物の名前を付けたのだといわれている。一説には、殷ではなくそれ以前の「夏王朝」時代に始まった、あるいは古代バビロニアが起源だという説もある。日本には、仏教の伝来とともに中国から入ってきたといわれるが、日本だけでなく東南アジア各国において、年、月、日あるいは時間や方位などを表す言葉として使われてきた。十二支が動物に当てはめて使われるようになったのは、親しみやすくわかりやすいようにとの配慮だろうが、だいたいは本来の言葉の音(おん)が似ている動物を当てはめたのだろう。最初がネズミで2番目が牛になったのは、「7月は土用丑の日」でふれたように、お釈迦様が呼んだときに真っ先に駆けつけたのは牛だったが、ネズミは牛の頭に乗っかってお釈迦様の前で牛の前に飛び降りたから、ネズミが1番で牛は2番になってしまったという童話や民話がある。こういった話は、東南アジア各国にもあるようで、動物を当てはめたのは、仏教と大きな関係があることを示している。

去年は「子(ね)」の年だった。詳しくは「戊子(ぼし、つちのえね)」である。子は、殷の時代には「孳(し)」といって、種子に生命誕生の兆しが見え始める状態を指す言葉だったが、これを動物のネズミに当てはめた。ネズミは、ヤマアラシやリスとともに齧歯類(げっしるい)の哺乳動物で、ネズミの種類は千数百種といわれている。日本では、分類学上ネズミ、ヤマネ、サバクヤマネ、オナガネズミ、トビネズミの5科にわかれるが、そのネズミ科のなかのドブネズミ、クマネズミ、ハツカネズミを通称「家ネズミ」その他を「野ネズミ」という。

大黒天の使いか、悪魔の使いか

『古事記』の中に、ネズミと大黒様の話がある。兄神たちにいじめられた大国主命(オオクニヌシノミコト)は地下の国に逃れ、そこで建速須佐之男命(タケハヤスサノオノミコト・素戔嗚尊)の娘と結婚するが、義父のスサノオに、いろいろと難題をふっかけられる。あるとき、「矢を射って拾ってきなさい」と命じられて野に入ると、火を付けられてしまった。困った大国主命は、ネズミに導かれて穴に身を隠して火をやり過ごしたという。また矢はネズミが探してきてくれた。そんな話から、ネズミと大黒天とを結びつけ、ネズミは大黒天の使いであり、五穀豊穰、家内安全を祈る「ネズミ信仰」なるものがある。また、ネズミは、繁殖力が旺盛なところから商売繁盛などに関連づけて、大黒様と結びつけるようになったのだろう。

しかし、一般的にはあまり印象がよろしくない。おとぎ話には、猫はネズミに嘘をつかれてのんびりとやってきたので十二支に入らなかったのが、以来猫はネズミを追い回すのだともいわれていて、何となくネズミは小ずるい感じがする。また、ネズミはペスト(黒死病)を媒介するといわれているので、ヨーロッパでは、ネズミは悪魔の使いだとして嫌われている。中世、ヨーロッパではペストが流行して、ヨーロッパ人の三分の二の人が死んだといわれているが、もっと古くからペストが流行したと思われる節がある。ギリシャ神話にも、アポロンの怒りに触れたギリシャ軍の話があるが、これもペストの流行によるものという説があるし、古代イスラエル人から「契約の櫃」を盗み出したペルシテ人を苦しめたのもペストだという。余談だが、中世ヨーロッパでは悪臭がペストの流行を妨げるとして、ニンニクを腰にぶら下げるといふ奇妙なことが流行ったというし、疫病はユダヤ人のせいだとしてユダヤ人の迫害がひどかったなどと大騒ぎだったようである。

日本でも、農家がせっかく丹誠を込めて作った穀類を食べてしまうことなどもあって、その繁殖力の強さと雑食性から、人間の生活を脅かすようになり、農家だけでなく多くの人たちから嫌われている。昔は、赤ん坊がネズミに齧られたということがよくあった。ミルクの匂いに誘われたネズミが赤ん坊の柔肌に齧りついたものだが、飽食の現代では、このような被害はなくなった。

悪いことに、ネズミは非常に知恵が働く動物で、人間とネズミとの知恵比べや攻防戦が果てしなく続いている。静岡県の登呂遺跡から出土した弥生時代(BC 3世紀～AD 3世紀)の高床式倉庫には、柱に平たい板を付けてネズミが上れないように工夫してあった。この板は通称「ネズミ返し」と呼んでいる。たとえば貨物船などが岸壁に接岸すると、岸壁に係留するために舳を張るが、ここにもネズミ返しを付ける。しかし、積み荷に紛れ込んで密航するネズミもいるし、ときどき東南アジア方面から「頭の黒いネズミ」も紛れ込んで密航を企てるようだから、海上保安庁も頭を痛めているというが、わが家でも二人の子供たちが自立する以前は、こっそり自分のために隠しておいた冷蔵庫の中のケーキを、二人の「頭の黒いネズミ」が食べてしまうので、家内がいつも大騒ぎをしていた。最近では料理用の酒の減り方が激しいといって、また頭の黒いネズミが出た、と雲竹斎を睨む。ごく普通の家庭においても、主婦はいろいろな種類のネズミの被害に頭を痛めているのだ。

ネズミは天国、人は地獄

わが国には「ネズミ講」という詐欺がある。一人が何人かの人を講に誘い、誘われた人が次々と他の人を誘って、そのたびに儲けていくという理屈なのだが、結局は最初の人だけが儲かって後が続かないというのが普通である。これはネズミの繁殖力が非常に旺盛なことから来ているのだが、ネズミ講は、当局がいくら取り締まっても、次から次ぎへと現れる。こういうところもネズミと似ている。

ネズミは、20日から30日くらいの妊娠期間で、子供を5匹から10匹も産むといわれている。また、雌が妊娠するのも早く、生後一ヶ月から一ヶ月半で交尾をするというから、黙っていれば1年間に繁殖するネズミの数は大変なものになる。これが「ネズミ算」といわれる由縁なのだが、暇と興味のある人は、実際に計算してみるのもいい。もっとも、ネズミ講と同じように、計算どおりに行けば、地球上はネズミだらけになってしまうのだが、ネズミには「地走り」という行動があって、繁殖しすぎると、脳に異常を起こし、大挙して一直線に走り出し、最終的には狂ったように海に飛び込んで行くのだそうである。種の保存という厳粛な自然淘汰現象なのだろうが、人間界も、過去何十年に一度は大きな戦争でオスが死に絶えていき、急激な人口爆発を押さえていた。いってみれば、戦争とは一種の人智を越えた自然の法則に沿ったものだ、といった学者がいるが、さて

また、蛇や鳥などの天敵がいるから、ネズミの数は一定に保たれる理屈だが、都会では天敵がないから、その数は異常に多い。田畑や湖沼の少ない都会では、蛇は少ないがカラスは多い。とはいえ、都会のカラスは、何も動くネズミを追いかけなくても、ゴミ置き場に行けばもっと美味しいものが簡単に手に入るから、ネズミには見向きもしない。また、都会にも猫がいるではないか、という人もいるが、猫がネズミを捕るのは遺伝的なものではなく、親からの学習によるものだ。ネズミなんぞ捕る技術は、飽食の時代に育った都会の猫には、もうない。そう、今の諸君と同じなのだ。今の東京などはネズミの天国である。殺鼠剤であの世の天国に行ってもらいたくても、薬物の耐性が強くなってきたから簡単にはいかない。かえって、バカなペットの猫や犬が殺鼠剤を食べて天国に行ってしまう。時には赤ん坊まで巻き添えを食らう。ああ、人間界は地獄だ。